

佐藤 典司 賞

(奈良県奈良市)

小角 亨

## 「忘れないでほしい 我が家の礎」

私が七歳の頃、父は沖縄で戦死した。

従つて、私は母の手ひとつで育てられたといつてよい。戦後の騒然とした時代を、裁縫という技術を持っていたとはいえ、女手ひとつで、二人の子供を育てるのは、並大抵のことではなかったろう。

私が夜半に目をさませば、必ず階下からミシンの踏む音が聞こえたものだ。母は七十七歳で亡くなった。

没後、母の持物を整理していたら、日記のようなものが出て来た。

何気なく頁をめくっていたら、私が始めてアメリカへ海外研修に行った折、家族に書き送った絵葉書について、短く述べてあった。

今日九月八日、初めての便り届く。何とのをポストを覗いて見ると入っていた。家の者は皆留守なので、早速佛様に御禮申し上げて、ゆっくり読ませてもらう。幸せな気持なのに、なぜか涙がとめども流れる。

安心と家の者皆が便りを待っていたからだと思う。

帰国まで元気で澤山勉強出来ます様にお祈りする。

今日十日、第二第三便届く。どちらも元気で大いに見聞を廣めている由。

有難い事とします。どちらの絵葉書も何度も眺め思いをはせる。

今日は、こちらも初秋の空は青く澄み渡り……

さるすべりの花の咲き誇る姿も、又格別のものを覚ゆ。

健康で楽しい旅を続けさせて戴けますようお願いする。

母が書きなれた万年筆で一心に書いている姿が浮かんでくる。

亡くなった日も咲いていた紅いさるすべりの花と、

澄んだ空を見上げる母の遠いまなざしを想像することが出来る。

我が子の幸せを、これほどまでに自分の幸せと感じてくれる人がいたことを、

今さらながら悟つて、有難たい想いに涙がとめどなく、頬を伝う。

息子を一人前の人間として、世に送りだすために、

我が身を犠牲にして尽くしてくれた「ばあちゃん」がいたこと、

そして、その大きな愛が、

永い年月を経ても、なお現在の平穏な生活の基盤を支えつづけていることを、

この文ぶんを読んだ家族みんなが忘れないでほしい。